

# 文化庁月報



1986-1

No. 208

## 【表紙】

重要文化財

刺繍袱紗

(奈良県 興福院)

解説は30ページ

題デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

# もくじ

初春の宗教民俗	桜井徳太郎 4
仏教と正月	藤吉慈海 8
新春の神社	櫻井勝之進 10

- ・地域文化活動紹介シリーズ⑪ 福島県・矢吹町 13
- ・町並紹介シリーズ⑩ 倉敷川畔、成羽町吹屋 16
- ・三浦長官夫妻、韓国を訪問 18

## 文化庁ニュース

- ・昭和60年度(第40回記念)芸術祭賞決まる……………20
- ・日本語教育研究協議会、中国帰国者に対する日本語指導者研修会の開催……………21
- ・重要無形民俗文化財の指定等  
——文化財保護審議会の答申——……………22
- ・指定文化財展示取扱講習会行う……………24
- ・第32回文化財防火デー……………25
- ・昭和60年度歴史民俗資料館等専門職員研修会開催さる……………26

展 覧 会	近世ヨーロッパ素描名作展 国立西洋美術館 27
	19世紀ドイツ絵画名作展 東京国立近代美術館 28
	人形工芸 東京国立近代美術館(工芸館) 29

- ・文化庁企画・提供 美をもとめて2月放送予定 26
- ・文化庁行事報告及び予定 30
- ・国立劇場ニュース 31

# 三浦長官夫妻、韓国を訪問

昨年十二月二日から六日までの五日間、韓国文化公報部の招きを受けた三浦長官と曾野綾子夫人のお供をして、ソウルと慶州の二市を訪れることができた。以下、簡単にその模様を記してみよう。

十二月二日、午前十時に成田を出発した飛行機は、二時間有余のうちに雪をかぶった山並みを眼下に見て、金文化公報部次官、御巫駐韓日本大使らの出迎える金浦空港に到着した。

ソウルの中心にあるロッテ・ホテルに旅装を解いた後、午後三時、文化公報部に李長官及び金次官を表敬訪問した。韓国側は韓中央博物館長、黄文化交流部長が席に加わり、また御巫大使もこれに同席した。三浦長官と李長官との間で、日韓間の文化交流に関する当面の問題を中心に、約三十分間の意見交換が行われた。

文公部を辞した後、まだ昨日の雪がかすかに残っている南山中腹の国立劇場を視察した。三浦長官からいくつかの質問が出されたが、当劇場の一、五〇〇席は極めて妥当な規模と考えている由であり、また、専属の六団体の将来の在り方につき苦慮している

のために努めていかなければならない旨の挨拶を行い、参加者に多大の感銘を与えた。わずか十分間のスピーチであったが、深い共感の波の広がっていくのが感得された。

このあと、島田日本人会理事夫妻らとともに、大使公邸における夕食会に招待された。十二月四日、金次官、御巫大使らに見送られ、ソウル駅九時発の「セマウル号」で慶州に向かった。韓中央博物館長の同行を得て、韓国の文化財に関する話なども聞きながら、車窓を流れる田舎の風景を賞でつつ、四人で四時間半の楽しい旅を続け、午後一時三十五分刻に慶州に到着した。

呉慶州市長、安藤釜山総領事らの出迎えを受け、宿舎の慶州東急ホテルに一旦荷を置いた後、午後三時、慶州国立博物館を訪問した。鄭館長や、前の館長でもある韓中央博物館長の懇切な説明を受けながら、本館のほか、別館二棟のほぼ全部を三時間近くかけて見学した。新羅の故地である慶州に置かれた当館の充実振りがうかがわれた。

午後六時から、安藤総領事主催の夕食会に出席。韓国側からは、韓館長、鄭館長、呉市長のほか、市の教育、警察のトップが出席し、なごやかな懇談の時間をもたれた。

翌五日、午前九時からナザレ園を訪問した。戦時中韓国人と結婚し、終戦前後に渡韓した後、四十年の星霜の間に身心障害となったり、身寄りを失って生活困窮におちいった日本婦人を取容、保護している施設であり、金理事長や宗事務長の労をねぎらう一方、十数人の日本婦人との茶話会の席上で、「北国の春」のカラオケや「野崎参り」のおどりが披露された。帰途、新羅第三十八代元聖王の墓に比定されている

の旨が、許劇場長から語られた。

次いで午後五時頃、ソウル市の東南にある百濟時代の夢村土城遺跡の発掘現場を訪れた。丘の上まで運んでくれたジープが、途中の泥濘の中、車輪が空転して立往生のところを、後から別の車で押してもらいやっと脱出するというハプニングもあった。この遺跡は、北漢山城と南漢山城を結ぶ線上の中心に位置し、北の高句麗に備えるため漢江を背後にひかえて立地しているとのことであるが、薄暮からソウルのあたりがはるか左方向に見えるようになる頃まで、発掘責任者から熱心な説明を受けた。

午後七時から、ロッテ・ホテル内における李長官主催の夕食会に招待された。主賓は三浦長官夫妻、御巫大使夫妻に大使館関係者も招かれた。韓国側は、鄭文化芸術振興院長夫妻、兪海外公報館長、韓中央博物館長、趙芸術文化団体総連合会長のほか、言論、文学、美術等の各界を代表する文化人が出席、和気あいあいとした雰囲気の中で、極めて友好的な交換が行われた。

十二月三日、金次官主催の朝食会に三浦長官夫妻が出席。兪海外公報館長、韓中央博物館長、白前交通部長官が同席した。



慶州「掛陵」前の三浦長官夫妻

る掛陵の見学を経て、高麗祭の竊場を訪れ、制作の模様を見せてもらった。ちなみに、曾野夫人は、のぼり窯の中まで入って内部を見学した。

正午過ぎ、慶州金氏発祥の伝説がある鷄林の脇の「瑤石宮」において、三浦長官の主催で、韓式料理による昼食会を催した。韓館長、金ナザレ園理事長、安藤総領事ほかを招待し、歓談した。

昼食後、すぐ隣にある古い民俗家屋の見学をした後、皇龍寺趾を訪れ、発掘後の整備された寺域全体を土塁の上から眺望した。風もよく、小春日和りの暖かい陽射しの中で、西暦五五三年に着工、九十年かけて完工したといわれるこの寺の往時の壮大なさまをしのんだ。

次いで、古墳公園の中を散策し、天馬塚の内部を見学してから、午後三時、市庁舎に呉市長を訪問した。呉市長との懇談の後、同市が奈良市と姉妹都市

午前十時に国立中央博物館を訪問。韓館長から概略の説明を聞いた後、高麗青磁の展示を中心に館内を見学した。さらに、本年八月から新館としてオープンする予定の元政府の建物の工事現場まで足をのばし、開設が予定されている日本室の該当場所を視察した。我が国にも展示品について協力方の要請があるため、三浦長官自ら歩測して広さ等を確認した。午前十一時、近接の世宗文化会館を視察。ここの大劇場は四、二〇〇席を擁する大規模なものであるが、専属二団体の将来の扱いについては、国立劇場と同じような悩みをもっていることを李館長から聞かされた。

十二時半から、ロッテ・ホテル内において、三浦長官主催による昼食会を開催した。金次官、兪海外公報館長、金東亜日報名誉会長夫妻、朴KBS社長、全現代美術館長、その他各界文化人を招待し、御巫大使夫妻に大使館関係者の出席も得て、前日夜と同様、友好的な雰囲気の中で歓談が交わされた。

午後三時半、ソウル南郊にあるハンセン氏病患者の収容施設であり、かねてから三浦長官夫妻が個人的に援助を行ってきたラザロ村を訪問。患者はもとより、地元後援団体の人々からも熱烈な歓迎を受けた。曾野夫人はすでに旧知の間柄でもあったため、患者一人ひとりと握手し、ある熟年の婦人とは包擁を交わすなどして旧交をあたためた。このラザロ村訪問の模様は、現地紙にも大きく報道された。

夕刻、日本留学経験者のパーティに出席。これは、毎年大使館が開催している恒例のものであるが、今年ほどくに三浦長官の訪韓に時期をあわせたようである。二〇〇人を上回る出席者を前に、三浦長官が、「日韓ともに手を携えて、アジアの文化の確立と発

となることに伴って開設した奈良室を視察。さほど広い部屋ではないが、春日大社などの写真パネルが壁面を飾り、かたわらのケースの内外には、奈良に關係する置き物や飾り扇が展示されていた。

市庁舎を辞してから、新羅の文武王が六七四年に造営した人造池である雁鴨池を見学し、さらに、南山麓に到り、仏無寺裏の磨崖彫像を見学してこの日の行程を終えた。

夜、鄭館長主催の夕食会に招かれ、東国大学校金博士、詩人の尹氏、仏国寺、石窟庵の住職等と交歓の機会を得た。

十二月六日、釜山まで直行。龍頭山公園のタワー上から市内を一望した後、魚市場をぶらつきながら見物した。

正午過ぎ、安藤総領事公邸の昼食会に、山村日本人会長夫妻、村上日本中学校長夫妻とともに招待され、歓談をした。

午後二時十五分、安藤総領事らの見送りを受け、金海空港から帰国の途についた。

以上、時間をおいながら、かけ足で今回訪韓の概略を紹介した。

極めて圧縮されたスケジュールであったが、文化公報部の各スタッフとの交歓は言うまでもなく、各種文化施設の視察や著名文化人との交流、元日本留学生との懇談、さらにはラザロ村やナザレ園の訪問など、三浦長官夫妻は精力的に日程をこなし、それぞれの場面で韓国側に深い感銘と印象を与え、よく日韓文化交流の実をあげ、訪韓の目的を達せられた。

(文化普及課文化普及企画官 根本 昭)

【編 集 後 記】

○明けまして、おめでとうございます。  
編集者一同、今年もより充実した誌面をつくってまいりたいと考えていますので、御支援の程よろしくお願いたします。  
○今月号は新春にふさわしく、桜井(徳)、藤吉、櫻井(勝)の三先生に、民俗学、仏教、神社神道それぞれの立場から、初春の村落、寺院、あるいは神社の風景を書いて頂きました。日本の正月風景も年とともに変容しつつありますが、三先生の論文、随想を読むと、農耕、漁労民族としての日本人と神との結びつきを改めて想起させられます。  
○六十一年度予算案が昨年暮に閣議決定されました。厳しい財政状況の下ではあります。文化庁予算等においては、第二国立劇場の設立準備、国民文化祭の開催、敦煌文化財保存修復研究協力等、我が国文化振興の新しい芽を育てるための経費を計上しています。(S)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業課  
TEL(03)2681-2411(代表)

「文化庁月報」一月号

(通巻第108号)

昭和61年1月25日印刷・発行

編集 文化庁

発行所 株式会社 ぎょうせい  
〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

本社 〒100 東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒162 東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (03)2681-2411(代表)

振替口座 東京 九一六六一番

印刷所 (株)行政学会印刷所

定価 1,800円(送料四五百円)  
年間購読料 21,600円(送料共)